

「最近韓国若手はぜんぜんお酒飲まなくなっちゃったんでうれしいですよ」

俺は日本人だ。だからきつと、うれしいというのは「若い人と酒が呑めて」ということについてだろう。朴さんは目を細めて子供のようによく笑う。

つい口端が上がった。

「俺も朴さんとかうやうやえて呑めて話せてうれしいですよ」

「アハハ、そう言ってもらえたらうれしいなあ」

朴さんはプロレスラーのような大きな体を揺らして、今度は口を開けて笑った。この二時間の間に何度も見たその笑顔はとても朗らかで、そして愉快だ。俺もつられて歯を見せて笑う。

朴さんとはつい二時間前にこの店で会ったばかりの間柄だ。にもかかわらず、朴さんにとっては行きつけの、俺にとっては初めて入ったワインバーのワインセラーと一緒に選んだワインボトルと一緒に楽しんでいる。つまり、朴さんはとても友好的で社交的で、良い人だ。

「美嘉さん、パテを二人前下さい」

「はあ〜い」

間延びした返事したのはカウンター内に一人立つ、店主のお姉さんだ。ここ二時間で聞いていた話からするに想像よりもいくつか年齢は上のように思うが、見た目は二十代後半あたりにしか見えない。

「今日はよく食べるしよく飲みますねえ」

「こんなよく飲めて楽しく不快なく話せる方なんてなかなかいませんから」

朴さんは今飲んでいるジュラの赤ワインの前にグラスワインを何杯かすでに飲んでいて、顔色はあまり変わらないように見えるが、それだけ飲んでいれば多少は酔っていないければおかしい。ただ、そもそも店内が薄暗いので顔色ははつきりとはわからない。

俺は朴さんからの言葉を嬉しく感じた。朴さんはどうやらほどほどに社会低地位のある人ようだった。そんな人から褒められるのは決して悪い気はしない。

「そう言ってもらえるのは嬉しいです。ありがとうございます」

朴さんと店主の美嘉さんはきよんととして、そして顔を合わせて。

「「しっかりとしますねー」」

声をも揃えた。

俺はまた歯を見せて笑った。

「嬉しいですね」

そう、素直に返す。さ、と飲酒を薦められ、それにも素直に応える。

グラスを揺らし、香りを立たせる。それを嗅ぎながら、口に含む。

「……ああ、おいしい」

そっと喉に流しながら、しみじみと心からつぶやいた。

ふたりもまた、心から喜んでくれた。失恋の傷口は痛んだが、癒えつつもあった。